

# Ⅲ 中 学 部 の 研 究

# 目 次

1. 研究の動機 .....	33
(1) 体育の意義	
(2) この研究以前の取り組み	
(3) 生徒の実態	
2. 研究の方向 .....	34
(1) 1年次( S 58.4 ~ S 59.5 )の研究	
(2) 2年次の考え方	
① テーマのとらえ方	
② “のる”運動について	
③ “のる”運動をめざすための場の設定	
④ 実践に向けて	
3. 授業の実践 .....	41
(1) 題材一覧表	
(2) 帯時間と単位時間における体育指導の位置づけ	
(3) 指 導 例	
① 5月題材      ボール運動「グランドテニス」	
② 6月題材      器械運動「とび箱運動」	
③ 考 察	
4. 評 価 .....	53
(1) 評価の方向	
(2) 評価の実際と考察	
① 題材内評価	
② 自己評価(がんばり表)	
③ 長期的評価	
④ そ の 他	
5. まとめと今後の課題 .....	60

# 生き生きと動く子どもを育てる体育指導はどうあるべきか

## — 生徒が“のる”運動をたしかめる —

### 1. 研究の動機

#### (1) 体育の意義

人は、運動によって心肺機能の向上、行動体力の向上という肉体的な健康のみならず、運動することによるストレスの解消により精神的な健康も得ることができる。また、感覚機能の高まりを促進し、脳への刺激を生じ発達を促すとともに社会性を養う学習の一つでもある。さらに会得された運動への興味や技能は、音楽や美術と並び余暇の利用に役立つものである。

このように、運動は諸々の価値を内包し人が生活し成長する上で欠くことのできない「大切なもの」である。しかしながら、現代に生きる子どもたちは、彼らの生活の中でそれを十分確保しているであろうか。

一手足を存分に伸ばし、力いっぱい走る—このような運動を行う空間は、住宅事情の変化や増加した交通機関に奪われ、その時間は、非活動的な遊びの一つであるテレビに奪われているのが現状である。とりわけ、精神発達遅滞児は、知的・社会的遅れや身体的障害のため残された空間と時間の中でもなお一層のこと、人間にとって「大切な運動」を行っていないと言いきっていいのではないだろうか。それは彼らの発達段階に沿った運動用具が準備されていなかったり、共に運動するところの相手がいなかったりすることなどに大きな原因があると考えられる。

家庭生活において十分な運動を行っていない彼らに対して、わたしたちは、運動する時間を確保し、彼らの発達に沿った運動用具を準備してやり、共に運動する楽しさを味わわせなければならない。また、そうすることが、学校での自由時間の運動を導き、ひいては、家庭生活での運動の生活化へと広がっていくことになる。このように「大切な運動」をしない子どもたちを、運動する子どもへと変化させていく学習の中心が、教科体育であると考えるとき、その重要性を認識し、指導計画及び指導法の改善に、より一層の研究を重ねなければならない。

#### (2) この研究以前の取り組み

昭和55年4月開校、現在地に移転するまでの2年間は附属中学校での間借り生活で、授業時間はもちろん、昼休み時間も思うようにグラウンドや体育館を使えず、体を動かす活動は不十分だった。

開校当初使っていた特殊学級時代の指導計画を実態に即しての小・中・高一貫をめざした指導計画に改善し、現在地への移転を機に養護学校の体育のあり方を模索し、修正しながら実践してきた。グラウンドや体育館、市販の教具等の物的環境を生かし、走る運動を主体にバトミン

トン、ボールけりやボール投げ、マット運動を取り入れ、週3時間の指導をしてきた。また、朝のランニングも取り入れ体力づくりに努めてきた。

しかし、指導体制の不備をはじめ、運動発達と精神発達のかかわりを考えた指導や、いろいろな用具を組み合わせ変化に富んだ授業の展開などが十分なされず、生き生きと学習に参加することの困難な生徒が多くみられた。

### (3) 生徒の実態

本校中学部の生徒の運動諸機能は、全体的に見てアンバランスな発達を示し、運動機能検査におけるMOAも、3.2歳から11.6歳と幅が大きい。自ら進んで体を動かそうとする意欲、態度に乏しく、機能的にも知的にも比較的高い水準にいる一部の生徒が、運動をいやがったり、目的に沿った運動ができなかったりすることが多く見られたりする。これらは、成長過程における運動経験不足と体を動かす楽しさを十分味わっていないことなどによるものと思われる。

例えば遊びの場面では、一人遊びが多く自転車や四輪車等の乗り物での遊びがほとんどで、時々ボールを相手に遊ぶ姿が見られる程度である。自分から友達とかかわりを求めて遊んだり、いろいろな遊具を使って楽しむ姿は少ない。また、家庭においては、遊び相手がなく、テレビや玩具、マンガ雑誌、テープやレコード音楽などで大半の時間を過ごし、運動的遊びはほとんどしていない。

さらに、生育歴から、遊び経験不足や、それによる対人関係、社会性の欠如も指摘され、集団参加の面からみても、自己中心性の強いものが多く、気力に満ちたはじめある参加はできない。これまでの体育時の様子を見ても、ほとんどの生徒が教師の指示や援助を必要とした受身的な活動で、活気に乏しく喜々とした表情はあまり見られなかった。

## 2. 研究の方向

### (1) 1年次（S5 8.4～S5 9.5）の研究

前述したような生徒の実態に立ち、学校・学部経営目標の具現化や全体的発達に大きな影響を及ぼす身体活動、体位の向上が著しいこの時期に体を鍛えることの必要性などから体育の研究の重要性を認め、次の4項目をめざして、テーマ研究に取り組んだ。

- ① 楽しい運動    ② 基本運動の重視    ③ 運動の生活化    ④ 社会性の育成

「生き生きと動く子どもを育てる体育指導はどうあるべきか。」

—— 生徒が“のる”運動をさぐる ——

そこで、わたしたちは、生徒たちが能動的に学習する姿、つまり望むべき生徒たちの学習状態を、その効果の面からとらえ、彼らが生き生きと活動している状態であると考えた。生き生

きとは、能動的に活動していることにより、彼らが心をゆり動かされ、五感と筋肉を十分働かせ、運動を楽しんでいる状態であり、このような状態をつくりだす運動をのる運動ととらえ、研究にあたり次のような仮説を設定した。

仮説-1-

“のる”運動を「いっぱい」「継続」させれば、体力、運動技能はもとより、社会性も高まり、情緒が安定し、生き生きとした子どもとなっていくのではないだろうか。

仮説-2-

適切な集団の中で、子ども自身のもつ技能を最大限に引きだし、運動に対する意欲や意識を向上させるためには、素材の特性を十分生かした教材・教具を開発し、運動させるべきではないだろうか。

そこで、まずの運動をさぐるために素材に視点をあて、素材の特性及びその特性を十分生かす条件—子どもたちの運動への動機づけを図り、その取り組みを持続させるもの—を次のように考え、指導計画づくりと合わせて教材・教具の開発に研究の主力をおいた。

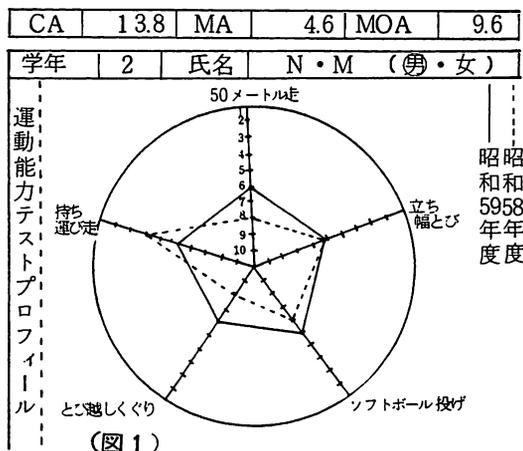
- 素材に新奇さがあること。
- 速い感触があること。
- 適度の抵抗感があること。
- 適度の緊張感があること。
- 成就への見通しがあること。
- 偶然性があること。

例えば、58年11月の実践「ボールを使った運動」においては、漁業用の網を素材にして作られた二連の大きなかごを体育館の天井にぶらさげ、廃棄された硬式用テニスボールを下から投げ入れる運動「かご入れボール」と、工夫されたラケットにより、卓球台を利用しピンポン玉を打ちころがす運動「ころがしピンポン」を展開し実践を試みた。また、59年1月題材「根気くらべ」では、古タイヤやチューブを素材に下肢の筋持久力を高める「タイヤ引き」、床面用や自家用車等の清掃に使われるモップを素材にした「モップ走」、3月教材では、古板（表面にマンガの絵を書いたもの）に4個のキャスターを付けころがるスクーターボートと名づけた乗り物を製作するなど、基本運動を重視し、楽しい運動をめざしてテーマを追求してきた。

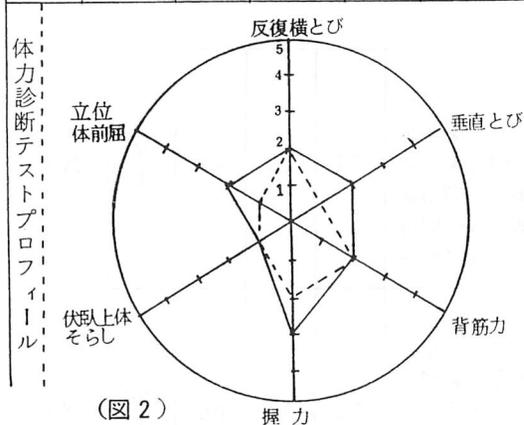
図1は、ダウン症児の運動能力テストの変容を表したプロフィールである。

図2は、自閉児の体力診断テストの変容を表したプロフィールである。

両者とも伸びが見られ、われわれに—すじの光を与えてくれた。



学年	2	氏名	N・S	(男・女)	
CA	13.2	MA	5.9	MOA	9.2



など、生徒たちは、以前に比べてより生き生きと活動するようになった。

ゲームを通して楽しみながら体力づくりに励んでいる姿の見られる体育の時間と合わせて、基本的運動をくりかえすことにより、体力づくりをめざす「運動の時間」を週時程に帯時間として位置づけ、サーキット方式を中心とした学習の実践も継続してきた。

以上のような1年次の研究を通して考えられたことは、のる運動を「いっぱい」「継続」させれば、運動技能も習得され、生徒たちは今までより体力が向上し、さらに、社会性の高まりや情緒の安定が図られ、これらのことが生き生きと動く子どもを育てる一つの礎となっているのではないかということであった。

また、子どもたちの運動に対する意欲を最大限に引き出すために、わたしたちは、素材の特性を生かした教材・教具を開発し運動させることが重要であることも再確認させられた。

しかし、このような運動に生徒たちがなぜのったのか、のっていた状態の子どもの心はどうなっているかなどをよりよく理解するための「意識」や「意欲」に関する研究、また、のっているかどうかの評価をどのようにおこない、体力や社会性の高まりなどについて、全体や個々の変容を知るための評価方法はどうすればよいか、さらに、運動の生活化を図るためにどのような手だてをすればよいかなど次年度にむけての大きな研究課題となった。

このようにして、わたしたちは、生徒たちがのる運動とは何かについて頭をひねりながらさぐってきたのである。

態度面においても、

- ・ 今まで運動ぎらいで廊下にすわりこむことの多かったH児やM児などは、積極的に体育の学習に参加するようになった。
- ・ 体育の授業準備に進んで手伝いしてくれる男の子の姿が見られるようになった。
- ・ 体育の授業において、並び方がはやくなったり、競技への参加が積極的になったりするとともに、見学の態度も高まってきた。
- ・ ゲーム等における勝敗やでき、ふできに関する話題が校内でふえてきた。

(楽しいダンス)



## (2) 2年次の考え方

### ア テーマのとらえ方

1年次に述べたように、わたしたちは、「心が揺り動かされることにより、五感や筋肉を働かせ、意欲的に活動する」状態を「生き生きと動く」状態ととらえ、更に、「生き生きと動く状態を作り出す運動」を「のる運動」ととらえた。

このようなとらえ方の上に立って、1年次には「生徒がのる運動をさぐる」というサブテーマのもとに、快い刺激や変化を与えると考えられる運動の素材に視点を当てた研究を実践し、中間の評価を行うことで、わたしたちの研究がそれなりの成果をおさめていること、及びいくつかの課題が残されていることを確認することができた。

したがって、2年次は1年次の反省に基づき、残されたいくつかの課題解決のために、実践を重ねることで研究を深め、更に、より総括的に評価を行うことで研究の成果を確認するという立場に立って、次のようなテーマとサブテーマを設定した。

「生き生きと動く子どもを育てる体育指導はどうあるべきか」  
—— 生徒が“のる”運動をたしかめる ——

### イ “のる”運動について

ここで、わたしたちは1年次の研究で残された課題、即ちのる運動（心が揺り動かされ、意欲的に活動する状態をつくり出す運動）とはどういうことかについて考えてみたい。

子どもたちが行動を起こす場合、大きく分けて2とおりの状況が考えられる。一つには学習自体には動機が含まれておらず、外的に動機づけられる場合と、もう一つは活動そのものの中に動機づけの要因が含まれる場合である。前者の場合、その行為を持続させるためには、絶えず周囲からの動機づけを必要とするものであるが、後者においては、一つの課題の解決が、より高次の課題の解決へと子どもを促していく。つまり、後者の活動は「人がそれに従事することにより、自己を有能で自己決定的であると感知することのできるような活動」（デシ、1980）であり、わたしたちは前者の「行為」だけでなく、後者の「活動」へと子どもたちを導くことが、意欲をもたせるために必要であると考えた。

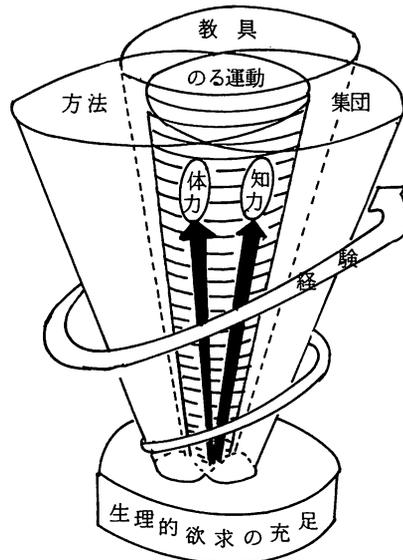
また、見方を変えるならば、動機には、目前の具体的状況と直接に結びつき短期的な作用を及ぼす動機（直接的動機）と、発達段階によって特徴づけられている動機（一般的動機）がある（坂野、1981）。前者は子どもの興味と深いかわりを持ち、後者は、課題（社会的環境）と子どもの能力とのずれによって引き起こされるものととらえることができる。また、子どもの新しい欲求、関心、志向と、以前に作られて習慣化されている思考や行動の方法とのあいだのずれなどについても同様のことがいえる。

このような視点に立って、わたしたちが1年次に「子どもたちがのるための素材及び教材・教具の条件」として考え出した項目について整理してみると、「素材の新奇さ」「快い感触」などは、前者の直接的動機としてとらえることができ、「適度の抵抗感」「成就への見通し」などは、一般的動機としてとらえることができる。例えば、グランドテニスのラケットを見て、「おや、めずらしい形(色)だな。」と感じ、ボールに触れて、「おや軽くて柔らかいぞ。」などと感ずることで、何らかの興味を持ち、直接的動機づけが行われることになる。そして競技をしていく中で、最初は興味の対象であった「新奇さ」や「感触」に関する意識は自動化され、子どもたちは、ボールをうまく打ち返すこと。仲間と協力して試合に勝つこと自体に興味を示していくようになる。

### ウ “のる” 運動をめざすための場の設定

わたしたちは、このように子どもの心を揺り動かし、意欲的に活動させること、即ち「のる運動」をめざすために、どのような場の設定をする必要があるのだろうか、という考えのもとに、1年次の研究の成果と反省をふまえながら、図3に示したように3つの構成要素を考えた。

まず一つは、1年次に検証された「素材の特性を生かした教具」である。前述のようにわたしたちは、研究以前の取り組みでは市販の教具を本校の子どもたちに十分に生かすことができなかったが、自作の教具を製作し、子どもたちに与えていくことで子どもを生き生きと活動させることができることがわかった。グランドテニスを例にあげるならば、まず、ボールは、子どもが追いつける能力の最近接領域内である必要がある。これは、形や材質、重さなどの工夫により、条件を整えることができる。ラケットについても、子どもが自由に



操作でき、ボールを的確にとらえるためには、形、大きさ、材質等の工夫が必要であり、コートについても同様のことがいえる。

次に、子どもたちをとりまく「集団」である。前のところで述べたように本校の子どもたちは、知的にも、体力的にも、社会的にも個人差が大きい。従って、競争場面においては、似たような能力(体力、知力等を考慮したもの)

図3. “のる” 運動をめざすための場の設定

の子どもの組み合わせ、もしくは、相手によって力を調節できる教師との組み合わせにより、適度な抵抗感を持たせることができる。また、様々な特性をもつ子どもたちで仲間を構成させることで、それぞれの能力を発揮させることができ、自己効力感を味わわせることができるとともに、協力関係等の成立も期待できる。

もう一つは、「方法」である。例えば、体力、運動機能の面では10歳の発達を示しているとしても、精神年齢では3歳程度の発達を示す子どもがいる。このような場合、ルールは、3歳児でも理解できるような簡易なものではなくてはならないだろうし、同時に、運動量では、10歳児にとって適度な量を確保でき、技能的にも達成可能な方法を考えなくてはならない。また、子どもが理解できる範囲内での形成評価的な自己評価の導入は、要求水準を適切に設定させるなかで、成就への見通しを持たせたり、適度な抵抗感を持たせることができ、意欲を高めるためには、有効な手段となるであろう。更に、毎時の授業場面の中で、演技(競技)発表の機会を設けることは、基本的な要求の一つである社会的承認の欲求を満足させるものであり、このことは、その活動にうちこむことができるようにするとともに、更に新しい高次の目標への原動力となる。

わたしたちは、以上の3つの構成要素を、子どもの発達の最近接領域内に設定すること、換言すれば、直接的動機と、一般的動機を有機的に組み合わせた指導を行うことで、学習に興味を持たせ、意欲的に活動を持続させること、即ちの運動をめざすことができると考える。

また、子どもたちのこのような活動が最も効果的に行われるには、生理的にも適切な状態である必要がある。このためには、図3に示したように、生理的欲求(睡眠、飢えなど)の充足が根底になくしてはならない。

わたしたちは、以上で述べたような考え方をもとに、次のような仮説を設定した。

適切な集団の中で、子どもの発達に応じた教具を準備し、適切な方法で運動を継続させれば、子どもたちは運動に親しみ、体力は向上するであろう。

## エ 実践に向けて

上記の考え方と仮説の検証のために、わたしたちは次のようなことに留意して実践をすすめることにした。

まず、題材の配列にあたっては、生徒の発達段階や内容の程度の配慮、他教科・特別活動との関連、季節の条件等を十分に考慮して配列する必要がある。

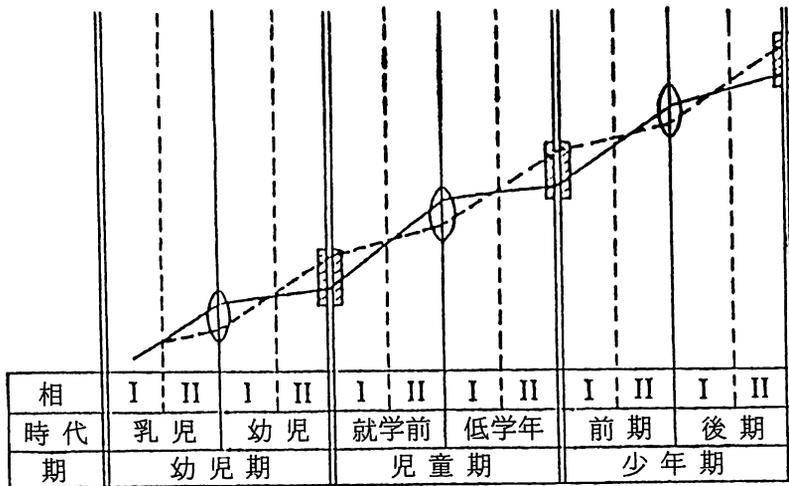
次に、中学生という発達段階から見た、体育の指導に必要な時数、及びその時間帯の生かし方について工夫が必要であろう。即ち、短時間でも毎日の継続的な学習が必要な指導内容もあり、40分もしくはそれ以上のまとまった時間を必要とする内容もあると思われるからである。

また、ある題材で指導を展開していく場合、題材の性質上、様々なグルーピングの形態が考えられる。前述の構成要素の「集団」とも関連するが、題材によっては、大きなグループで活動させるもの、マンツーマンに近い形態で行うものなどがあり、編成にあたっては、周到な実態把握が必要となる。

最後に、これらの実践の成果を正しく把握するための評価について、様々な角度から、わたしたちは慎重に取り組みねばならないだろう。

＜参考資料： 発達へと導くもの＞

エリコニンによる発達段階の区分



——— 欲求-動機的分野の発達      ▨ 期から期への移行      ○ 時代から時代への移行  
 - - - - 技術-操作的能力の発達

ソビエトの心理学者エリコニンは、欲求-動機的分野の発達と、技能-操作的能力の発達との間の矛盾関係としてとらえようとした(上図)。発達の一つの時代は一方の系の発展、他方の系の停滞としてとらえ、両方の系のギャップ-矛盾がある限度に達すると、発展してきた系は停滞し、停滞してきた系は、発展へと転換する。

坂野登著「脳のはたらきと子どもの教育」より

### 3. 授業の実践

わたしたちは、これまでの考え方に基づき、「生徒がのる運動をたしかめる」のテーマ研究のために、題材配列、時間帯、及び集団・教具・方法の3要素を考慮した場の設定に視点をあて、実践していくことにした。

#### (1) 題材一覧表

月	題 材	時数	目 標	内 容
4	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 集団行動</li> <li>○ 短距離走</li> </ul>	6	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 教師の指示を見たり、聞いたりして素早く集まり、整列することができる。</li> <li>○ 合図を見たり、聞いたりして素早くスタートし短い距離を全力で走り通すことができる。</li> <li>○ 互いに協力し、助け合ってまっすぐ整列したり繰り返し練習したりするなかで、集団行動の決まりを知ることができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 「気をつけ」「休め」の練習</li> <li>○ 3列横隊の練習</li> <li>○ スタンディングスタート</li> <li>○ 疾走(15m, 20m, 30m)</li> </ul>
5	グラウンドテニス	8	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ ボールに素早く寄ったり、止めたり、打ち返したりすることができるようになり、それを生かしてゲームを楽しむことができる。</li> <li>○ 運動する場所の安全に気をつけ、最後まであきらめないでボールを追いかけるとともにきまりを守ったり、勝負を素直に認めたりして、仲よくゲームをすることができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 教師と打ち合う</li> <li>○ ピン倒し</li> <li>○ 1対1のゲーム</li> <li>○ 2対2のゲーム</li> <li>○ ゲーム大会</li> </ul>
6	とび箱運動	8	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ いろいろな高さの台からとびおりたり、腕で体を支えたりすることができるようになりそれを生かして腕立て支えとびおり、腕立てよこ側とび、腕立て開脚とびができる。</li> <li>○ とび箱や運動する場所の安全に気をつけ、何度も繰り返し練習するなかで、課題を克服・達成する喜びを味わい、とび箱の楽しさに気づくことができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 坂の上り降り(四つばい)</li> <li>○ とびおり</li> <li>○ 腕立て支えとびおり</li> <li>○ 腕立てよこ側とび</li> <li>○ 腕立て開脚とびのり</li> <li>○ 腕立て開脚とび</li> </ul>
7	水 泳	8	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 水中を歩いたり、走ったり、とびはねたり顔を水につけたり、水かけ遊びをしたりすることで水に慣れ、伏し浮きやけ伸び、バタ足ができるようになり、楽しく水泳(水遊び)ができる。</li> <li>○ 水泳の決まりやプール使用の約束を守り、仲よく助け合って、水泳(水遊び)ができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 水中歩き、走り</li> <li>○ 顔つけ</li> <li>○ 水かけ遊び</li> <li>○ くらげ浮き</li> <li>○ 伏し浮き、バタ足</li> <li>○ クロール、平泳ぎ</li> </ul>

9	短距離走 障害物競走	8	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 合図を聞いてひざを深く曲げた姿勢でのスタンディングスタートで素早くスタートし、全力で短い距離を走ることができ、それを生かして障害物競争では、スピードをおとさず楽しく競争することができる。</li> <li>○ 運動の場の安全に気をつけ、スタートの方法や障害物ののり越え方を工夫し、仲よく競技することができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ スタンディングスタート</li> <li>○ 疾走(30m, 50m, 100m)</li> <li>○ 網くぐり</li> <li>○ タイヤ引き</li> <li>○ ダンボールとび</li> <li>○ ラケットでドリブル</li> </ul>
10	鉄棒運動	8	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 鉄棒にぶらさがったり、とびのったり、脚をかけたることができるようになり、それを生かして、とび上がりおり、脚かけふり、脚ぬき回りなどが、調子よくできる。</li> <li>○ 運動する場所の安全に気をつけ、何度も繰り返し練習するなかで課題を克服・達成する喜びを味わい、鉄棒運動の楽しさに気づくことができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ スクーターポート遊び</li> <li>○ ぶらさがり</li> <li>○ とび上がりおり</li> <li>○ 前回りおり</li> <li>○ 脚かけぶらさがり</li> <li>○ 脚ぬき回り</li> </ul>
11	格 技 (男子)	8	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 正しい受け身や、相手を押したり、引いたり、倒したり、投げたりすることができ、それを生かしてマット落としレスリングの試合が楽しくできる。</li> <li>○ 服装やつめなど危険のないように注意し、また運動する場所の安全に気をつけ、練習など協力して取り組むとともに、勝負に対して正しい態度で楽しく試合ができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 受け身</li> <li>○ 力くらべ</li> <li>○ ケンケンずもう</li> <li>○ シャがみずもう</li> <li>○ マット落としレスリング</li> <li>○ 試合</li> </ul>
	ダンス (女子)	8	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ リボンや輪などいろいろな用具を使い、リズムや曲の速さに合わせて楽しく身体表現ができる。</li> <li>○ 教師の動きを模倣したり、自分で自由に表現したりして、互いに協力し、仲よく身体表現ができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 曲に合わせてリボンを振る。</li> <li>○ 直線を走る。</li> <li>○ 円形に走る</li> </ul>
12	走り幅とび	6	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 走り幅とびの方法に慣れさせ、遠くへとんだ喜び、友達や教師に認められた喜び、客観的な記録を残す喜びを味わうことができる。</li> <li>○ 協力して準備、後始末をしたり、役割を分担して学習を進めることができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 両脚とび</li> <li>○ とびおり</li> <li>○ 片脚踏切り、両脚着地</li> <li>○ 記録への挑戦</li> </ul>

1	サッカー	4	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ ボールに対して素早く移動し、ゴールに向かってけったり、相手ボールをけり返したりすることができ、それを生かしてゲームを楽しむことができる。</li> <li>○ 運動する場所の安全に気をつけ、ルールを守り、勝負を素直に認め、仲よくゲームをすることができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ シュート練習</li> <li>○ 教師とけり合う</li> <li>○ 1対1のゲーム</li> <li>○ 2対2のゲーム</li> <li>○ 3対3のゲーム</li> </ul>
2	持久走	4	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 身体が無駄な力をぬいた走り方で、自己のペースをくずさず最後まで走り通すことができる。</li> <li>○ 自己の体の調子に気を配り、最後までねばり強く走り通すことを通して、課題を克服・達成した喜びを味わい、走ることの楽しさに気づくことができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ インターバルトレーニング</li> <li>○ (1分、2分、3分、4分、5分) 間走</li> <li>○ 二人組によるジョギング</li> </ul>
3	マット運動	6	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ マット上で、とびはねたり、ころがったり、腕で体を支えたりして自由に遊ぶことができ、それを生かして姿勢や方向を変えながら、いろいろな回り方を工夫し楽しく回ることができる。</li> <li>○ 運動する場所の安全に気をつけ、何度も繰り返し練習するなかで、回るリズムをつかみ、課題を克服・達成した喜びを味わいながら楽しくマット運動ができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ ころがり遊び</li> <li>○ ゆりかご</li> <li>○ 横回り</li> <li>○ 前転</li> <li>○ 開脚前転</li> <li>○ 後転</li> </ul>



〔 11月題材：格技 〕

(2) 帯時間と単位時間における体育指導の位置づけ

項 区分	帯 時 間	単 位 時 間
ねらい	○ 基本的運動を繰り返すことにより、体力づくりを目指す。	○ ゲームを楽しむことにより、体力づくりを目指す。
時 間	○ 週2時間（月、火、木、金毎日20分ずつ）実施し、年間70時間を充てる。	○ 週2時間（火、金）実施し、総時間70時間を充てる。
指 導 形 態	○ 一斉指導が中心となる。	○ 個別指導または、グループ指導が中心となるが、一斉指導も行う。
学 習 方 式	○ サーキットを中心とした学習。	○ ゲームを中心とした学習

いずれにしても体育科としての指導であることには変わりないが、上の表に述べたような位置づけによって指導を行い、「運動の楽しさ——その結果としての体力づくり」という体育科の目標にせまっていくものである。

「継続は力なり」といわれるように、短時間学習ではあるが、継続的に指導できる「帯時間」では、月題材の主運動を技術要素に分解し、それをもとに基本的運動をサーキットに組み、繰り返し運動することによって体力づくりと、基本的技能の習得を目指した。一方、単位時間における指導では、子どもたちのもつ基本的運動能力を生かすスポーツ等を設定し、それを楽しむことによって体力づくりを目指した。つまり、それぞれの長所を生かした体育指導を実践しようとする。



（ 帯時間におけるサーキット運動の一  
場面。—— 鉄棒運動のための腕力  
つけることをねらいとした。 ）

(3) 指導例

① 5月題材：ボール運動〔グラウンドテニス〕

ア 帯時間の指導

ボール運動の基本的技能である「ける」「投げる」「打つ」運動を中心に取り入れたサーキットを組み、毎日継続させることにより、楽しみながらボールの扱いに慣れさせ、ボール運動に興味・関心を持たせるとともに、調整力・瞬発力・筋力などの体力の向上を目指すことを主なねらいとした。

集団： 一斉に行う。（運動によっては、個別指導を行う。）

教具： グラウンドテニス用ボールとラケット，サッカーボール，ピン，ダンボール

方法： 図4のサーキットコースを組み、能力に合った回数及びスピードで楽しみながら行わせる。

(ア) 学習の流れ

ランニング（外周4～6） → 準備・補強運動 → サーキット → 発表 → 整理運動 → あとしまつ

(イ) 運動内容

① 距離を変え並べたピンに向かってボールをけり、ピンを倒す。

（筋力，瞬発力，調整力）

② 二段に積み上げたダンボールに向かってボールを投げ，ダンボールを倒す。

（筋力，瞬発力，調整力）

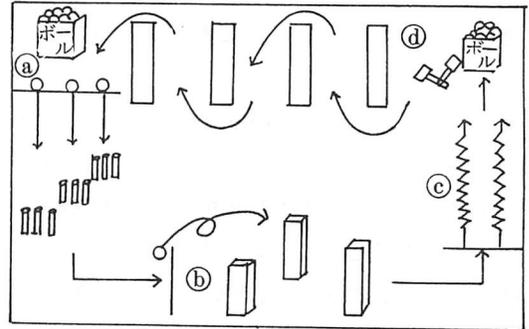
③ 片手ドリブルをしながら，約10メートル進む。

（調整力，巧み性）

④ グラウンドテニス用ボールとラケットを使い，ダンボールの間をジグザグにドリブルする。

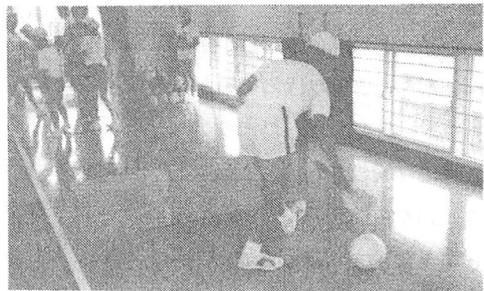
（調整力，巧み性）

図4. サーキットコース



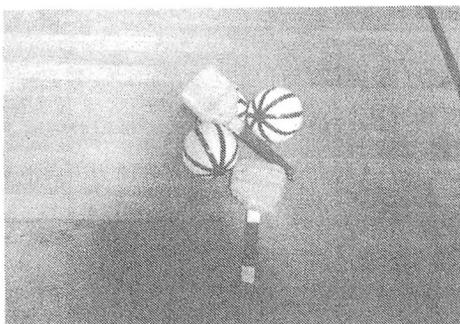
〔④の運動〕

〔①の運動〕



## イ 単位時間の指導

### (ア) 教 具

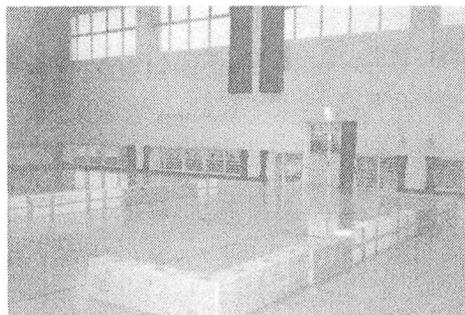


〔ラケット〕

五角形に切った発泡スチロール（厚さ4cm）に、ベニヤ板で取っ手をつけ、全体を黄色と緑色のビニールテープで巻いてあり、軽くて扱いやすく、快い感触がある。また、めずらしい色や形をしているため新奇性もある。

〔ボール〕

発泡スチロールの球（直径15～20cm）に、黄・緑・赤色のビニールテープを巻いてある。軽くて柔かいため快い感触があり、スピードがでにくく、あたっても痛くないため恐怖感が少ない。また、打った時に適度の抵抗感があり、カラフルな色をしているため新奇性もある。



〔コート〕

2, 3個ずつつなげた段ボール箱を、左右のサイドに並べたもの（シングルの時は後ろの方にも左右に1個ずつ並べた）。高さがあるため、ボールがコート外にでにくく、また、ゴールが広いので成就への見通しを持たせやすい。さらに、ぶつかっても痛くないために恐怖感が少なくなり、思い切りコート内を動き回ることができる。

### (イ) 集 団

試合などの競争場面において、緊迫したゲーム展開ができるように、体力（技能など）知力（ルール理解）及び、競争心を考慮し、力の差が少ない似たような能力の生徒で4つのグループを編成した。

(ウ) グループ別の指導

A グ ル ー プ		<p>ボールの動きを目で追って、すばやくボールに寄り、相手コートに強く打ち返すことや、相手のいないところにボールを打ち返すことができる。しかし2人制の試合でゴールキーパーになると、ボールへの反応が遅く、フォワードの打ちそこねたボールにすばやく寄っていき、ボールをつかむことはあまりない。</p>
		<p>それぞれのゴール線上から合図でスタートさせ、コート中央に置いたボールにすばやく寄り、強く打つ競争をさせた。また、2人組を作って、1人がラケットで打ったボールを1人が手でつかむというゴールキーパーの練習をさせた。さらに、フォワードが打ちそこねたボールをキーパーが手でとり、所定の位置に置き、またフォワードが打つというルールのもとで、2対2の練習試合を繰り返し行わせた。</p>
B グ ル ー プ		<p>ボールを追いかけて打つことはできるが、打つ力が弱く、ゴール線上から相手のゴールまでボールが届きにくい。また、ころがるボールを止めて打ったり、コート中央までドリブルしてから打つ技能は身につけていない。</p>
		<p>ゴール線上から、他方のゴール線上に置いてあるピンに向かってボールを打たせたり、ゴール線上に置いてあるボールを中央までラケットでドリブルしてきて、力強く打ち返させた。また、教師の打ったボールを1度止めてから打ち返す練習をさせた。さらに、ころがってきたボールを止めて、中央までドリブルしてから打つことを取り入れて、生徒同士1対1で繰り返し練習試合をさせた。その際、変化を持たせるため、試合の相手は、時々交代させた。</p>

C グ ル I プ		集団の実態	自分の近くのところまで来たボールには近寄って打ち返すが、遠くのボールを追いかけて打つことはあまりない。また、打つ力も弱く、相手のゴールまでは届きにくい。
		方 法	ゴール線上から、相手のゴール線上にいる教師に向かって力いっぱい打たせたり、コート中央に置いてあるボールに、両ゴール線からすばやく走り寄って打つ競争をさせた。また、教師が左右にころがしたボールを追いかけて、ゴールめがけて打たせた。その際、ボールはゆっくりとところがすことから始め徐々にスピードを速めていった。さらに、生徒同士1対1で繰り返し打ち合いをさせたり、練習試合をさせたりした。その際、変化を持たせるため、試合の相手は時々交代させた。
D グ ル I プ		集団の実態	目の前のところまで来たボールは打ち返すが、打ち返す力は弱く、方向も定まらない。また、ボールへの意識は弱く、自分からボールに近寄って打とうとはしない。
		方 法	コート中央に置いてあるボールを、ゴール線上に立っている教師に向かって打たせたり、教師のころがしたボールを追いかけて打たせた。その際、ボールは、生徒の近くにゆっくりとところがすことから始め、徐々に、ころがす範囲を広げ、ボールのスピードも速めていった。また、教師は、ボールの動きを絶えず声をかけて教え、ボールへの意識を持たせた。さらに、教師対生徒で繰り返し打ち合いをしたり、生徒同士1対1で練習試合をさせた。

（ 毎日練習する意欲を高めるとともに、自分の力をみんなの前で発揮することで自信を持たせ、さらには、グランドテニスの楽しさに気づかせ、生活（休み時間）の場でもすすんでやってみようとするのをねらいとし、最終時に大会を計画した。 ）

② 6月題材：器械運動〔とび箱運動〕

ア 帯時間の指導

とび箱運動の技術要素である助走・踏み切り・着手・着地のなかから、リズムカルに走る・踏み切りとび上がる・支え、突き離す・とびおるなどの基本的運動を組み合わせた。さらに、腕の力を強化するとともに高さへの恐怖心を取り除くための運動もサーキットに組み入れ、毎日継続させることにより、楽しみながら協応動作や調整力、筋力などの体力の向上を目指すことを主なねらいとした。

集団： 一斉に行なう。手押し車においては、実態に応じたペアを組ませる。

教具： とび箱、小ハードル、踏み切り板、マット、セフティマット、

方法： 図5のサーキットコースを組み、それぞれの運動場面に補助者をおき、能力に合った回数及びスピードで楽しみながら行わせる。

(ア) 学習の流れ

ランニング(外周 4~6) → 準備・補強運動 → 手押し車 → サーキット → 発表 → 整理運動 → あとしまつ

(イ) 運動内容

㉑ 二人組みで手押し車をする。

〔着手〕 (筋力)

㉒ 腹ばい、仰向けの四つばいですすむ。

〔着手〕 (筋力)

㉓ 小ハードルで小さざみ走をする。

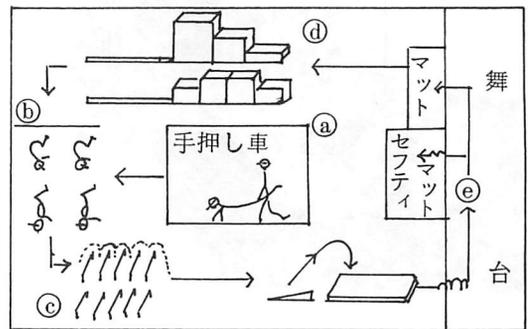
〔助走〕 (瞬発力)

㉔ 踏み切り板を使い、助走から両脚ジャンプをする。〔踏み切り〕(瞬発力)

㉕ 舞台によじ登り、マットにとびおり着地する。〔着手、着地〕(筋力)

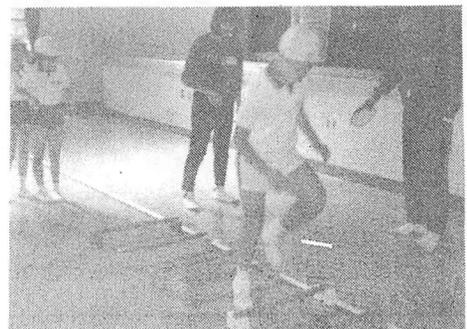
㉖ 高いとび箱に登り、渡ってとびおる。  
〔恐怖心を取り除く〕(調整力)

図5. サーキットコース



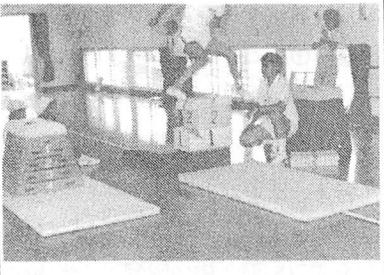
〔㉕の運動〕

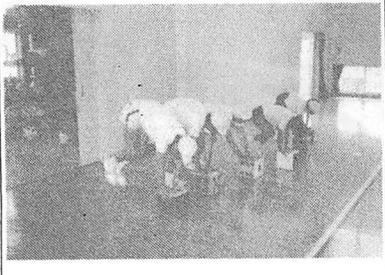
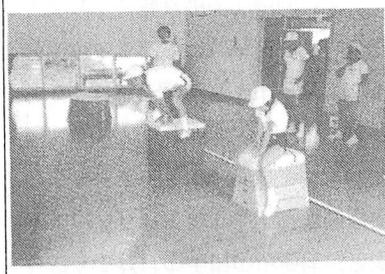
〔㉕の運動〕



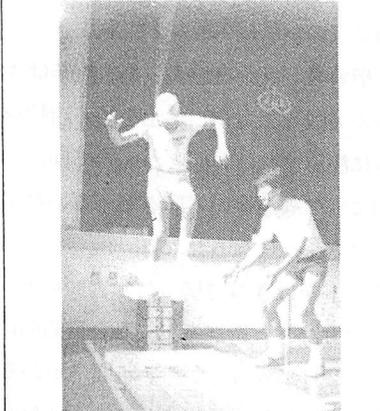
(イ) 単位時間の指導

課題の克服・達成を目指して、同系統での練習が可能になるように、体力（調整力・筋力・瞬発力など）及び恐怖心を考慮した似たような能力の生徒で、4つのグループを編成した。

A グ ル ー プ		集団の実態	ジャンプ力もあり、とび箱に着手してとび越すことはできるが、踏み切りのタイミングが悪く、助走から着地までのリズムがつかめない。
		教具	思い切りジャンプできるように、ぶつかっても痛くない小さなダンボール箱を用いた。ダンボール箱には段数を書いてある。また、手の位置を記してあるとび箱、足の位置を記してある踏み切り板、着地の時のショックを柔げるためのマットを用いた。
		方法	とび箱へのとびあがり降りさせたり、踏み切り板を用い、ダンボール箱の上を両脚踏み切りでとび越させた。また、とび箱で踏み切り板を使って腕立て開脚とびをさせた。この時、ダンボール箱、とび箱の高さは、課題が達成されたら徐々に高くしていった。がんばり表には、とび越したダンボール・とび箱の段数を書かせた。

B グ ル ー プ		集団の実態	自分の体は支えられるが、突き離す技能はなく、腕力も弱い。また、両脚ジャンプはできるが、ジャンプしてからの空間姿勢が保てず、開脚が困難である。
		教具	快い感触があるように、まわりをスポンジで囲んで、カラーのビニールでカバーしてある立方体（高さ22cm）。また、とび乗った位置がわかるように、台の上に色の違うテープを10cm間隔につけたとび箱と台の上に手の位置をテープで記したとび箱を用いた。
		方法	台に手をつき、両脚ジャンプする運動と、ジャンプして一度空中で開脚する運動を1分間ずつさせたり、とび箱で、腕立て開脚とび乗りや腕立て開脚とび越しをさせた。がんばり表には、ジャンプの回数を書かせたり、とび乗った位置のテープの色をぬらせたりした。

C グ ル ー プ		集団の実態	腕と脚の協応がうまくいかず、着手でバランスがくずれたり、腕力・脚力が弱く、とび箱にとび乗ることが困難である。
		教 具	手押し車の距離がわかるように、床の上に距離を書いたビニールテープをはった。また、思い切りジャンプできるように、ぶつかっても痛くない発泡スチロール板をとび箱の縦の延長上に置いた。発泡スチロール板（厚さ2cm）には、番号が書いてある。
		方 法	手押し車で、距離に挑戦させた。また、とび箱の上に乗る腕で体を支えたまま側 <sup>よ</sup> にとび降りさせたりとび箱に手をつき、置いてある発泡スチロールの上を腕立て <sup>よ</sup> とびさせた。とび箱の高さ、発泡スチロールは、課題が達成されたら徐々に高くしていった。がんばり表には、手押し車の距離、とび箱・発泡スチロールの段数を書かせた。

D グ ル ー プ		集団の実態	脚力が著しく弱く、両脚ジャンプ・両脚着地ができないため、舞台からのとび降りが困難である。また、腕力もなく、恐怖心も強い。
		教 具	快い感触があるように、舞台にかけたはしごの上にマットをのせたもの。また、落ちてもしないように、下にセフティマットを置いた。さらに、とび降りのためのとび箱と、とび降りた時のショックを柔らかげ、恐怖心を少なくするためのマットを用いた。
		方 法	はしごの上を肘を曲げず、膝をつかないようにして、四つ這いでのぼりおろさせた。また、舞台の上からセフティマットにとび降りさせたり、とび箱の上からマットにとび降りさせた。その時、とび箱の高さは能力に合わせて調節し、課題が達成されたら徐々に高くしていった。がんばり表には、とび箱の図をかき、とび降りた高さの所に色ぬりさせた。

（ 成就への見通しを持たせるために、各グループで「がんばり表」をつくり自己評価させたり、意欲を高めるために毎時間、グループごとに発表させたりした。また、成就した喜びを味わわせるために、最終時には発表会を行った。 ）

### ③ 考 察

#### ア グランドテニス

自作の教具を使用し、子どもたちが理解しやすいやさしいルールを取り入れて、考案されたこのグランドテニスに対して、子どもたちは、興味・関心を持ち、生き生きと活動する姿が見られた。

- 授業前の休み時間から、ラケットを振ったり、ボールに触れたりしていた。——ラケットやボールの色がカラフルで、形もめずらしかったので、これらの新奇性のある教具にたいへん興味を示したためと思われる。
- ころがってきたボールに自分から近寄っていき、思い切りラケットを振り、ボールを打っていた。——ボールが軽くて柔かく、ぶつかっても痛くないので、ボールに対する恐怖心が減少し、また、ラケットが軽くて扱いやすく、ころがってきたボールをとらえやすかったためと思われる。
- 試合では、コートいっぱい走りまわりゲームを十分に楽しんでいた。——ルールがやさしいものであり、グループも能力に応じて編成されていたため、子どもたちの試合に対する意欲も喚起されやすく、競争心もわきやすかったためと思われる。

そして、グランドテニス実践後の現在でも、子どもたちが休み時間に友達同士さそいあって、中庭でゲームを楽しんでいる光景がよく見られる。



昼休み、中庭でグランドテニスを楽しむ子どもたち

#### イ とび箱運動

グループごとに課題を設定し、それに対する自己評価を取り入れたとび箱運動に対して子どもたちには、すすんで準備をしている姿や、課題に対して意欲的に取り組んでいる姿が見られた。また、最終日の発表会では、それまで以上の記録を出す子どもが多かった。

- 各グループごとに子どもの実態に応じた教具が工夫されていたので、能力に応じた運動が展開されやすく、恐怖心も減少されやすかったためと思われる。
- 教師の適切な補助や声かけ、また、最終日の発表会が1つの意欲づけになったり、がんばり表により、自分の課題に対する目標が決めやすく、目標達成の喜びを味わいやすかったりしたためではないかと思われる。

しかし、教師と組んで運動をした2、3人の子どもたちは、教師があまりにも手かげんしすぎたため、動きが鈍く、十分に活動できず、むしろ、子ども同士活動させた方が、生き生きとなったという失敗例もあった。この点に関しては、今後さらに検討していきたい。

## 4. 評 価

### (1) 評価の方向

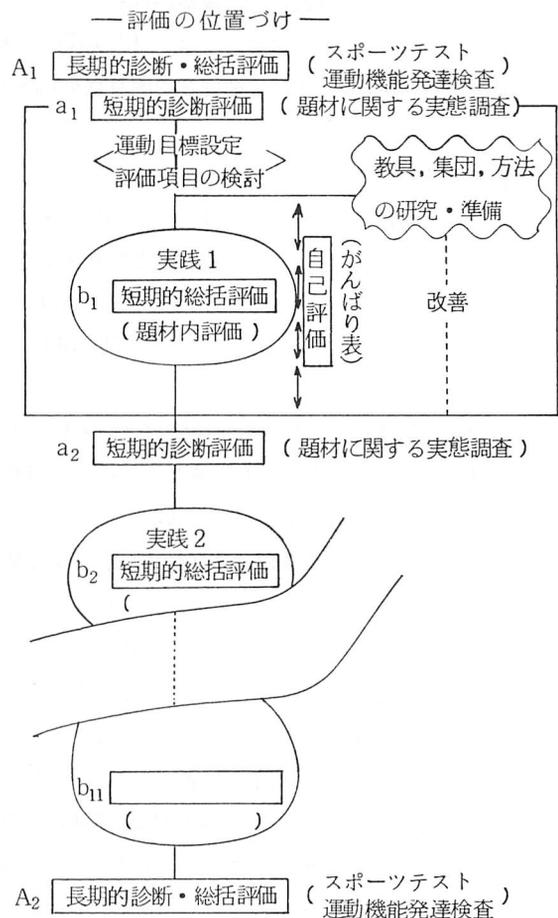
のる運動のこれまでの取り組みを通して、わたしたちは、生徒たち一人ひとりの動きが以前と比べて活発になり、自ら運動を楽しもうとする姿が多くなってきているという印象を徐々に強く抱くようになってきた。

しかし、なぜ生徒たちが意欲的に取り組んだか、また、消極的な場面はどんな条件の中に見られたのか、この研究の取り組みを通して、生徒たちにはどのような力がついてきたのかななどの問題に対しては、観念的に実践の方向の妥当性を確信するだけで、指導の改善に直結した具体的客観的評価を通しての考察にまでは至っていなかった。

そこで、評価においては、これまでの反省をふまえ、評価そのものの位置づけや評価方法等についての検討をしながらできるだけ生徒たちの姿や、わたしたちの取り組みが具体的に見えてくるように改善を加えていくことにした。

そのために、評価を右上図のように位置づけし、評価にあたっては、心身の障害や個人差のはなはだしい生徒たちの実態をふまえ、多様な観点から個人的に進歩向上を促すような絶対評価を主体とする評価法（題材内評価、自己評価）に重点を移していった。

- 長期的診断・総括評価…スポーツテスト、運動機能発達検査により、体力についての年度ごとの変容を追い、集団や個人の傾向を把握する。  
（図 A<sub>1</sub>、A<sub>2</sub>）
- 短期的診断評価………題材に関する事前の実態調査であり、教具、集団、方法についての考察資料となる。  
（図 a<sub>1</sub>、a<sub>2</sub>）
- 短期的総括評価………授業改善に資する題材内評価であるが、同一生徒同一題材であれば長期的総括評価にもなる。また頻度により形成的評価としても生かされる。  
（図 b<sub>1</sub>、b<sub>2</sub>…b<sub>11</sub>）
- 自己評価（がんばり表）………実態に即した目標で、教師等の奨励のもとに行う。



(2) 評価の実際と考察

① 題材内評価

ア 意義と配慮事項

- 障害をもつ生徒たちに対する長期的評価の分析の難しさに対し、「のった」かどうかを各題材においてより具体的にとらえ、変容を分析する。
- 授業における「教具」「集団」「方法」が、生徒たちに適切であったかどうかを知り、指導法の改善に役立てる。
- 各題材における第1時（実態）と最終時をチェックし、調査項目ごとに変容をおさえ、各生徒に対する問題点をさぐる。
- 調査項目は「技能」「態度」面に関して細目化、系統化をめざして作成し、発達段階が一目でわかるようにする。
- 調査者は第1時と最終時とも、同一人物がおこない、客観的評価に近づける。

イ 評価例（グラウンドテニス型運動）と考察（図6・7） ○…第1時◎…最終時●…変化なし

技能( 1. 全くない 2. まれに  
3. 時々 4. 殆ど 5. いつも )

態度( 1. 全くない 2. まれに  
3. 時々 4. 殆ど 5. いつも )

		評 価				
		1	2	3	4	5
ボ ー ル を	ア 見る(目で追う)			⊕	⊕	
	イ 近よる 歩いて近よる				⊕	
	ウ 止っているボールを押し返す		⊕	⊕		
	エ 自分の所に来たボールを押し返す				⊕	
	オ ほどよい所に来たボールを押し返す			⊕	⊕	
	カ 止っているボールを打ち返す				⊕	⊕
	キ 自分の所に来たボールを打ち返す				⊕	⊕
	ク ころがって来るボールを打ち返す			⊕		
	ケ 体を横にかまえて打ち返す				⊕	
	コ フォアハンドで打つ				⊕	
	サ バックハンドで打つ	⊕	⊕			
	シ フォアハンドとバックハンドで打ちかわける	⊕			⊕	
	ス 相手に打ち返す				⊕	
	セ 強く打ち返す		⊕		⊕	
ソ すぐ打ち返す		⊕	⊕			
タ 抜かれまいと横に動く		⊕	⊕			

		評 価				
		1	2	3	4	5
(1)	ア 指示された場所にすばやく集まる		⊕	⊕		
	イ 指示された役割を意欲的に行う		⊕	⊕		
	ウ 対戦相手を意識する			⊕	⊕	
	エ のがしたボールをとりに行く		⊕		⊕	
態 度	オ 友達のゲームを注視する		⊕		⊕	
	カ 声や身ぶりで応援する	⊕		⊕		
	キ 準備、後始末を意欲的に行う	⊕		⊕		
	ク あきずに根気強く練習する		⊕	⊕		
(2)	ア 自分のゴールと敵のゴールの区別ができる				⊕	
	イ 勝った時に喜ぶ			⊕		⊕
	ウ 負けた時にくやしがる	⊕	⊕			
	エ 敵味方がわかる				⊕	⊕
	オ 勝負がわかる			⊕		
	カ サーブを定位置から打つ				⊕	
	キ ボールを手であつかわない				⊕	
ク センターラインを越えない				⊕		
ケ 笛の合図に従う				⊕		

- 3年生男子のこの生徒は、最終時にグラウンドテニス大会を設定したこと（方法）で、これまでに見られなかった意欲と力強い動きが顕著にみられた。また、対戦相手（集団）によって動きが左右され、自分とほぼ同レベルの相手の動きが高まるにつれ、前後左右のフットワークを使い出した。

技能 ( 1. 全くない 2. まれに 3. 時々 4. 殆ど 5. いつも )

態度 ( 1. 全くない 2. まれに 3. 時々 4. 殆ど 5. いつも )

		評 価				
		1	2	3	4	5
ボ ー ル を	ア 見る (目で追う)	+	+	+	+	+
	イ 近よる 歩いて近よる	+	+	+	+	+
	ウ 走って近よる	+	+	+	+	+
	エ 止っているボールを押し返す	+	+	+	+	+
	オ 自分の所に来たボールを押し返す	+	+	+	+	+
	カ ほどよい所に来たボールを押し返す	+	+	+	+	+
	キ 止っているボールを打ち返す	+	+	+	+	+
	ク 自分の所に来たボールを打ち返す	+	+	+	+	+
	ケ ころがって来るボールを打ち返す	+	+	+	+	+
	コ 体を横にかまえて打ち返す	+	+	+	+	+
	サ フォアハンドで打つ	+	+	+	+	+
	シ バックハンドで打つ	+	+	+	+	+
	ス フォアハンドとバックハンドで打ち合わせる	+	+	+	+	+
	セ 相手に打ち返す	+	+	+	+	+
	ソ 強く打ち返す	+	+	+	+	+
	タ すぐ打ち返す	+	+	+	+	+
タ 抜かれまいと横に動く	+	+	+	+	+	

		評 価					
		1	2	3	4	5	
(1)	ア 指示された場所にすばやく集まる。	+	+	+	+	+	
	イ 指示された役割を意欲的に行う	+	+	+	+	+	
	ウ 対戦相手を意識する	+	+	+	+	+	
	エ のがしたボールをとりに行く	+	+	+	+	+	
	オ 友達のゲームを注視する	+	+	+	+	+	
	カ 声や身ぶりで応援する	+	+	+	+	+	
	キ 準備, 後始末を意欲的に行う	+	+	+	+	+	
	ク あきずに根気強く練習する	+	+	+	+	+	
	(2)	ア 自分のゴールと敵のゴールの区別ができる	+	+	+	+	+
		イ 勝った時に喜ぶ	+	+	+	+	+
ウ 負けた時にくやしがる		+	+	+	+	+	
エ 敵味方がわかる		+	+	+	+	+	
オ 勝負がわかる		+	+	+	+	+	
カ サーブを定位置から打つ		+	+	+	+	+	
キ ボールを手であつかわない		+	+	+	+	+	
ク センターラインを越えない		+	+	+	+	+	
ケ 笛の合図に従う		+	+	+	+	+	

○ 1年生女子のこの生徒は、第1時にフェルトボールを使い、教師と対戦しているが、打ちやすい所にボールが返るため動きも少ない。最終時は、発泡スチロール製のボールでしかも相手が自分より強い生徒であったため(教具, 集団), そのスピードについていけず、オ・クの項目が落ちている。

② 自己評価(がんばり表)

(表1)

月/日	手おし果	かに果	ふりかけ果	餅とびこし
6/7	10m	4m	15まい (がたあ)	2まい
6/12	15m	4m	8まい おた	4まい
6/15	17m 5	5m	9まい	5まい

月/日	手おし果	かに果	ふりかけ果	餅とびこし
6/7	4m	4m	0まい	3まい
6/12	8m	6m	12まい	手おし果 0.5まい おた 2まい
6/13	12m	17m	13まい	2まい おた 5まい

月/日	手おし果	とびおしA子	とびこしH男
6/21	14m	1 だん	だん
6/25	15m	3 だん	だん

月/日	手おし果	とびおしA子	とびこしH男
6/21	10m	だん	3 だん
6/25	19m	4 だん	4 だん いりてん 4回だん

- 表1は、「とび箱運動」における生徒たちの自己評価である。運動を、より能動的に取り組ませるひとつの手だてとして実態に即した自己評価表のあり方を試行している段階であるが、数値であれ、絵であれ、何らかの形で生徒たち自身に運動への手がかりを持たせていきたいものである。表1の生徒たちには、教師等の激励の中で、自己の記録を更新していこうとする意欲的な取り組みがみられる。

### ③ 長期的評価

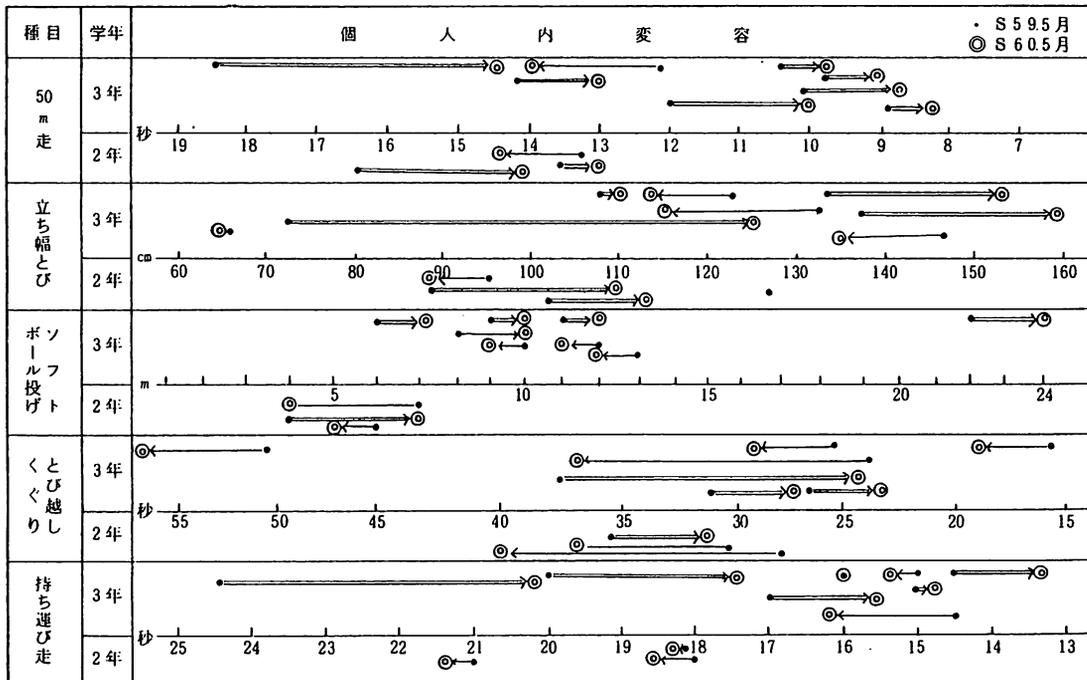
#### ア 意義と配慮事項

- スポーツテストと運動機能発達検査（半場式）を実施し、体力についての年度ごとの変容を追い、体育指導との関連をさぐる。
- 個人内評価として重点を置き、中学3年間の変容とその原因を多様な角度からさぐり個人または集団の傾向を知る。
- 種目や領域での全体的傾向を知り、指導計画作成時の一助とする。
- スポーツテストは、級に左右されず、記録そのものの変化に視点をあてて考察する。
- 運動機能発達検査（半場式）は、1年生時から13～16歳用で実施する。

#### イ 評価例と考察

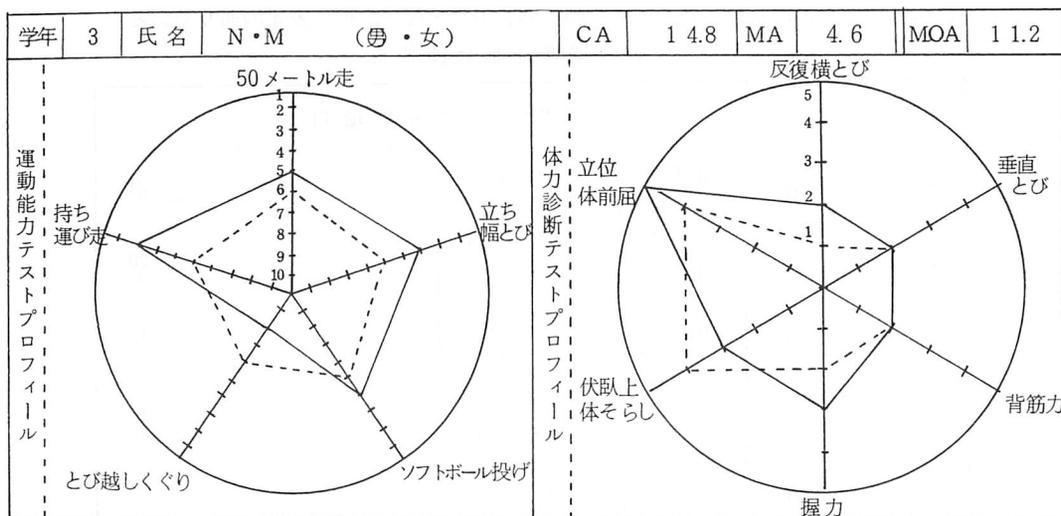
##### (ア) スポーツテスト

<運動能力テストの種目別個人変容> (図8)



- 伸びた生徒は、2・3年全体11名に対し、50m走9名、立ち幅とび6名、ソフトボール投げ7名、とび越しくぐり5名、持ち運び走5名である。走・跳・筋力を使う項目においては帯時間や単位時間での継続した運動が個々の能力を高めてきたものとも考えられる。一方、とび越しくぐりや持ち運び走においては、その方法の妥当性が問われ、測定時の状況にも大きく左右されてくるものと思われる。

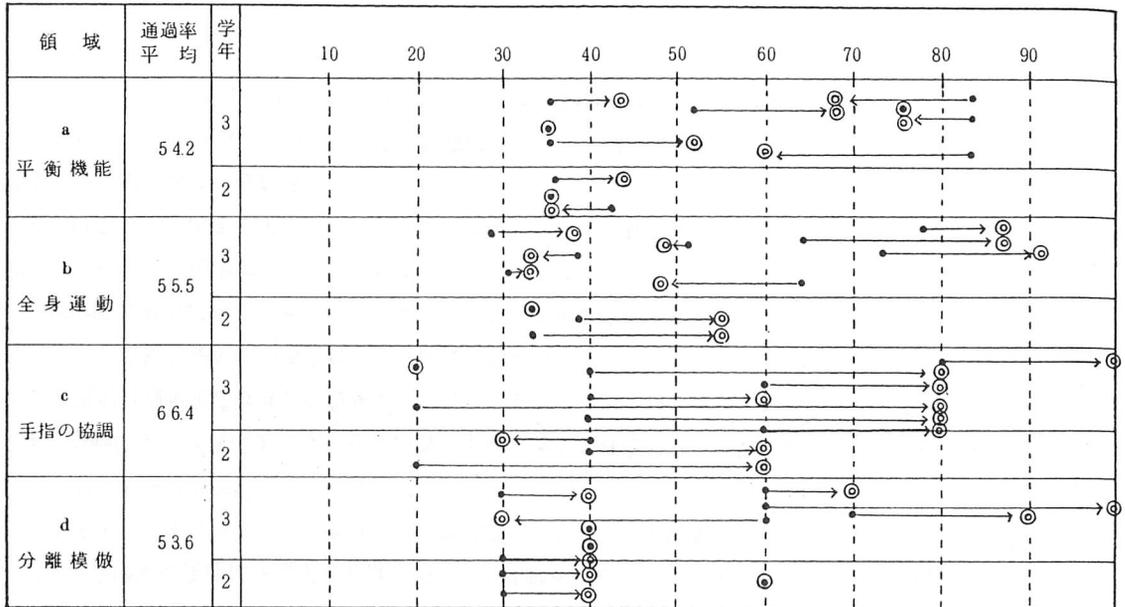
<個人の変容例>



ダウン症児のこの生徒は、活動的で運動場面においても精いっぱい力を発揮することが多い。また、技能的にも高く器用である。このテストにおいては、いずれも本人の意欲的な取り組みがみられた。その結果は、走・跳・筋力の伸びが大きく表われ、体力の伸びを確かめることができる。立位体前屈については、他のダウン症児2名と共通する柔軟性を示している。

(イ) 運動機能発達検査 (半場式)

<個人内変容> (図10) (・印…59年度 ◎…60年度 ○…年度別の変化なし)

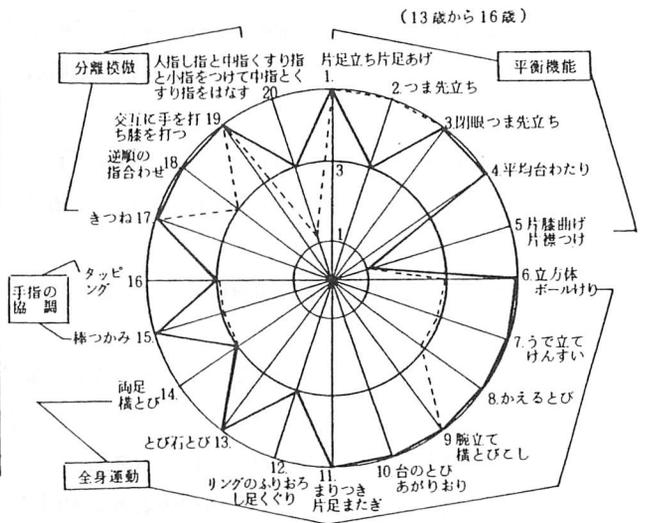


○ 上記発達検査の中で、特に体育指導との関連が予想される全身運動の領域においては、減退した生徒は少数でしかもその差はわずかであるのに対し、大多数の生徒が大きな伸びを示していることが読みとれる。c, dの領域は検査時の状況によってその結果が大きく左右されているものと思われ、aにおいては、片膝曲げ片膝つけの項目が全員できないものであることから項目についての検討も問われてくる。

<個人の変容例>

氏名	N・S	3年(男・女)	プロフィール				
領域	素点	通過率	CA	14.2	MA	5.9	
			102030405060708090				
a 平衡機能	19/25	76					
b 全身運動	41/45	91					
c 手指の協調	8/10	80					
d 分離模倣	18/20	90					

MOA	1 2 2	MOQ	8 6
	(9.2)		(7.0)



自閉的傾向にあるこの生徒は、体育の授業等においても、時間や回数を競う運動には全力を発揮しようとしめない。また、指示や激励に対して、運動が急に変化することも少なく、この検査はいつでも本人の自然な状態での結果と受けとめられる。その中で全身運動の項目と分離模倣の項目は全体的に伸びており、体育の指導と関連した体力の伸びと、その他の要素も含めて考えられる対人意識の深まりの表われとしても読みとることができる。

④ その他

ア 病欠日数の変化 (表2) (★印は昭和60年度11月30日現在)

学年	小 6	中 1	中 2	中 3
生徒				
N・H(1年女)	79	★4		
U・N(2年女)		30	★6	
Y・M(3年男)		22	17	★1
N・M(3年男)		14	9	★0

イ 生活の中へ

- グランドテニス用のラケットとボールを中庭に置いた。当初、一部の生徒で楽しんでいたが、現在ではその輪も広がり、いろいろ相手を変えて力強い打ち合いを続けている。
- 父親参観日に親子グランドテニス大会を催したところ、S・J(1年男)の家庭では、その後親子で学校のものと同じラケットとボールを作り、白熱した親子対戦を続けている。

ウ Y男の母親と転入前担任の感想(原文のまま)

成長期にはいった小学校高等年の頃から、両足首の痛みを訴え、診断の結果、幼少時の骨折のため、痛みを和らげるためにはマッサージの治療法だけといわれ毎日のように通いました。両足首の包帯もとる事もできませんでした。中学部2年に編入させてもらって以来、学校での山登り、かけっこ、ボールけり、その他農作業などでも自然と痛みを訴えなくなり、今では足の力強さにびっくり致しております。(母親)

てんかんの発作をもつとともに、知的発達の遅れや身体的に虚弱なところがあり、中学二年生になった時点で附属養護学校に転出した生徒です。当時は、小柄なうえにはだの色も青白く、なよなよとして見るからに弱々しい感じがしていました。手腕の力や動きも劣り、足首の故障も重なって、遊びや体育の授業への参加もきわめて消極的でした。ところが、最近になって体位も向上し、はだの色にもつやがよみがえって、いちだんとたくましくなってきたようです。とくに、当時は決して見ることでできなかった昼休みの遊びや体育の授業への積極的な参加姿勢、そしてボールを投げたりけったりする時の力強さ。登下校時の歩行のようすや仲良し運動会の徒歩で見た足腰の強さ…等々。本人の成長・発達を喜ぶとともに、日常の訓練や指導の尊さを痛感していることです。(転入前担任)

## 5. まとめと今後の課題

中学生の時期に、精一杯運動をさせて体力をつけさせたいものだ。でも「体育の時間」を嫌がって雲隠れする生徒もいるぞ。全ての生徒が「体育の時間」を楽しみにして待っている。体育で学習した事が生徒の喜びの声として聞かれる。そんな種目を、研究の結果として残したいね。

このような、わたしたちの悩みと理想をきっかけとして中学部の研究は2年前に始まった。生徒が楽しみにして待っている運動………の運動と名づけよう。サブテーマの誕生である。健常児に比べて運動の能力と知的な能力の発達がアンバランスな生徒たちである。健常児の運動、つまり小学校、中学校で行われている種目をそのまま導入してものる運動とはなり得ない。終始一貫してわたしたちの理想を実現するための源にあった考えである。

以来わたしたちは、身のまわりの様々な品物に目をつけ、教具の素材として利用できないものだろうか。この生徒たちによりよく認知でき、あるいは操作できる教具はどのようにして開発し、どう使わせ運動させるべきだろうか。理論と実践を絡ませ、そして評価しながら試行錯誤の中に研究をすすめてきた。

のる運動のひとつであるグラウンドテニスの用具である発泡スチロール製のラケットとボールの消耗と共に生徒たちは、変容した。週2回行われる「体育の時間」、20分間ずつ帯時間として行われる「運動の時間」。運動場へ、体育館へ向かう生徒たちの顔は、喜々としてきた。ある生徒は、かけ足で、またある生徒は教師と手をつなぎ。体育準備係のH・Kは、連日、運動の準備にいそがしい。「準備にいそごー。」声をかけると走ってやってくる。先日は、学部朝会で、その勤労ぶりを賞賛されこのうえなくうれしそうな顔をみせた。休み時間のボール遊び、家庭での父親とのグラウンドテニス、欠席日数の減少。わたしたちは、あらゆる方向からこの研究の評価を試みた。そして生徒がいきいきと、のる運動を継続して行えば体力も伴ってついてくることを確認した。ただわたしたちの研究は次のような課題をあらたにうきぼりにしながら継続させなければならない。

- (1) 現在まで行ってきたのる運動の改善、および新しいのる運動の開発。
- (2) 主として長期的評価を生かしての指導計画の改善。
- (3) 自由時間の運動を促進するための遊具、運動施設などの環境整備。

## 参考・引用文献一覧

文 献 名	著，編，訳者名	発 行 所
特殊教育諸学校学習指導要領		文 部 省
特殊教育諸学校学習指導要領解説		”
体育指導の手びき（養護学校用）		”
現代保健体育学体系「体育原理」	前川 峰雄	大修館書店
現代保健体育学体系「運動生理学」	朝比奈一男，中川 巧哉	”
体育教材学序説	佐藤 裕	黎明書房
幼児期の体育指導	遠山喜一郎，山下 博	不昧堂出版
ムーブメント教育－理論と実際－	肥田野直ほか訳	日本文化科学社
障害児臨床と発達援助	野西 恵三	協同出版
月刊誌「教育心理」		日本文化科学社
” 「発達の遅れと教育」		”
” 「体育科教育」		大修館書店
乳幼児の発達と活動意欲	秋葉 英則	青木書店
脳のはたらきと子どもの教育	坂野 登	”
意識とはなにか	”	”
内発的動機づけ	E. L. デシ	誠信書房
精神薄弱児の体育指導	木庭 修一，植野善太郎	
	齊藤 義夫	金子書房
障害をもつ子の体育指導	宮崎 直男，笹本 健	東洋館出版社
簡易体操の指導	石田 保之	不昧堂出版
体育科教育法	松田 岩男，宇土 正彦	大修館書店
スポーツと競技の心理	松田 岩男，長谷川浩一	
	藤田 厚	”
種目別現代トレーニング法	猪飼 道男，石河 利寛	
	金原 勇，松田 岩男	”
学校体育と現代トレーニング	”	”
アセスメントと評価	山口 薫	明治図書
現代教育評価講座 7	藤田 昌士，波多野義郎	第一法規
スポーツテスト	松島 茂善	”

